

オデッサ領事館異聞

角 茂 樹

神戸学院経済学論集

第52巻 第3・4号 抜刷

令和3年3月発行

オデッサ領事館異聞

角 茂 樹

1. オデッサという町

オデッサは黒海の北西部に位置するウクライナの港街である。温暖な気候と良港に恵まれているので古代ギリシャより住民が住んでいたが、1792年、ロシア・トルコ戦争に勝利したロシア帝国がこの地を支配してから街は急速に発展した。この時のロシア皇帝がエカテリーナ女帝であってそのため街の中央には女帝の銅像が立っている。19世紀にはロシア帝国内に於いてモスクワ、サンクト・ペトロスブルグ、ワルシャワに次ぐ人口を持つ大都会に発展した。この時のオデッサの知事がフランス人であったリシュリユー公爵（有名なリシュリユー枢機卿の甥）である。リシュリユー公爵は、フランス革命を避けてロシアに亡命しアレキサンダー一世皇帝の信任を得たことから1803年から1814年までこの地の知事を務めた。こうして19世紀のオデッサは「黒海の真珠」、「ロシア帝国の南の首都」と呼ばれる繁栄を誇る。リシュリユー公爵の功績はポチョムキン階段上の正面に建てられた銅像によって称えられている。オデッサの重要性に日本政府は早くから気がついており日露戦争直前の1902年から1937年まで領事館を置いていたことは良く知られている。又1965年には横浜市とオデッサ市が姉妹都市協定を結んでいる。明治から大正にかけて日本の絹、漆器、陶磁器が横浜からオデッサに運ばれた縁である。私が大使としてウクライナに駐箚していた2015年には、姉妹協定50周年を記念して数々の行事が行われ、私も数多くオデッサを訪問したので思い出深い街である。これまでオデッサにあっ

オデッサ領事館異聞

た日本領事館に関しまとまった記録がなかったので今般、外交史料館の助けを借りて日本総領事館の活動につきまとめてみた。

2. 名誉総領事時代

(1) 1874年、日本はロシア帝国首都ザンクト・ペトロスブルグに日本国公使館を開設した。オデッサの重要性に注目し日本の領事館の開設を強く求めたのは、1886年から10年以上ロシア公使を務め外務省随一のロシア通と言われた西徳二郎公使である。西の努力が実り1889年11月5日にヘルソン州（現ウウライナ）に領地を持つ土地の有力者コンスタンチン・アンドレフスキーが日本国名誉領事に任じられている。当時の記録（外務省公信）を読むと同人の年間給与は事務経費として千円であり破格の給与であったことがわかる。アンドレフスキーは、オデッサ総督であったロープ将軍が西公使に推薦してきた人物である。ところがアンドレフスキーは翌年の1890年5月に名誉領事の職を辞してしまう。西はその理由としてロシア政府がこの時オデッサ総督府を廃してロープ将軍が更迭されたことがあると説明している。アンドレフスキーはロープ将軍とよほど近かったようで同将軍の後ろ盾なしには職務を全うできないと考えたようだ。

(2) 西公使は、アンドレフスキーの後任名誉領事として1890年10月にオデッサの有力商人であったアレクサンドル・ラセーエフを東京に推薦している。同人はロープ将軍の後任としてオデッサ長官となったゼリヨヌイ海軍少将が推挙して来た人物である。西はオデッサは、商人の街であるので有力商人であるラセーエフは適任であるとしている。ラセーエフが正式に名誉領事に任命されたのは1891年10月であった。年俵は事務所経費として当初200円であったが1895年同名誉領事の要請により400円に増額されている。ラセーエフは、日本商品の見本市を開くなど精力的に活躍したが1898年1月20日市内の劇場で観劇中に心臓発作により突然逝去してしまう。外交史料館の公信記録をみると当時のロ

シアにおいてはロシア政府と大使館との口上書、名誉総領事と日本政府のやり取りはロシア語ではなくフランス語でなされている。⁽⁴⁾ ラセーエフが死去後の1899年には、同人が見本市のために収集した日本の物品がオデッサの美術館に寄贈されたとの記録がある。⁽⁵⁾ この背景にはラセーエフが日本との貿易にも関与していたので残された日本の物品が日本政府の公費で調達した見本品かラセーエフの商売上の物品か不明でありその処理を巡って問題が起きた事があげられる。私が大使時代、ウクライナの地方博物館に於いてかなり高級な日本の漆器、陶器を見せられたがひょっとしたらラセーエフの寄贈品の一部かもしれない。

3. 日露戦争前夜の領事館

(1) ラセーエフの突然の死去を受け1898年2月、林董（ただす）駐ロシア公使は、本国に対し今度はオデッサに名誉領事ではなく正式な領事館を開設すべきであるとの意見を送った。その理由として日本よりの絹、陶器、漆器と雑貨の対ロシア輸出及びロシアよりの石油の輸入に関してオデッサが重要であることに加え、ロシア黒海艦隊の動向を探る上でもオデッサが重要であることを強調している。林公使は又、ロシアに於いて樺太、ドイツで作られた低品質の雑貨が日本製品と称して売られておりオデッサに正式領事を置いてキエフ、オデッサにおけるこのようなまがい物の取引を監視する必要性についても述べている。⁽⁶⁾ しかし日本政府はすぐにはオデッサに正式領事を置くことを承認しなかった。当時の新興国日本にとって新たな領事館の開設は金がかかる案件であったのである。1899年6月、外務省から林ロシア公使に送られた電報を見ると帝国議会がオデッサに正式領事を置く予算を承認しなかったので代案としてロシア公使館より書記生を時々出張させること、しかし領事の肩書を与える事は帝国議会との関係で問題になるので行ってはならない事、正式領事ではなく名誉領事の任命を更に追求すべき事が書かれている。⁽⁷⁾ 同年9月には青木周蔵外務大臣よりロシア公使代理に対し直々に英語で名誉領事の件はどうなっているのかとの電報が発出されている。⁽⁸⁾ 当時の在外公館と外務省とのやりとりの電報

オデッサ領事館異聞

は英語でなされておりそれに訳をつけて外務所内に回覧されている。

(2) 日本とロシアの関係が朝鮮を巡って緊張すると、日本の海軍にとって黒海艦隊の動向を掴むことが急務となる。オデッサ総領事館の開設は、ロシアの軍事情勢入手のためにも最重要課題となったのである。こうして1901年12月にロシア勤務の経験がある飯島亀太郎を領事発令し同人は1902年3月にオデッサに着任している。飯島は、東京帝大を卒業し、1894年に行なわれた第1回文官高等試験外交科に合格した人物である。飯島は、まずオデッサのプリストルホテルに仮事務所を開設している。プリストルホテルは、今もオデッサにおける高級ホテルとして健在であって、私も宿泊したことがあるがロシア帝国時代の雰囲気は今も残るホテルである。飯島は、4月にはヴォロンツォフ街4番地に領事館と公邸を兼ねた建物に移っている。海辺を見渡す一等地である。

(3) 飯島はオデッサに於いて大いに活躍したようであり、外交資料館に残る公信記録を見ても日本産品のプロモーションをはじめ現地の商人との商談を良く行っている。1903年11月には大阪岩井商店がバクー油田の石油買い付けのためオデッサをおとずれたとの記録がある。飯島の仕事はバルカン情勢の把握もあったようで1903年セルビアに於いてクーデターによってアレキサンドル一世が惨殺されたことも飯島は東京に詳細に報告している。当時バルカン問題はロシアにとって極東問題と並んで最重要問題であってバルカンの動きがロシアの極東の動きに影響をあたえているとの認識が日本政府にあったのである。ロシア軍事情報に関しては、1903年4月、開設間もないオデッサに陸軍より歩兵大尉武藤信義が表向き留学生として又名前も武藤昇の仮名で情報収集のため派遣されており飯島はその手助けをしている。⁽⁹⁾ 武藤大尉は、オデッサに於いて黒海義勇艦隊の情報を「オデッサ地方の近情」として取りまとめ東京に送っている。⁽¹⁰⁾ 武藤大尉は、この中でロシアにとっての2大懸案は満洲問題とバルカン問題であるとして、ロシアがオデッサに於いて兵の増員を行っているとの風評は

そのどちらに対処するためのものか不明であるがロシア黒海艦隊にとってダーゲネルス海峡の開放が急務であると述べている。武藤大尉はこれまで黒海義勇艦隊（注、露土戦争後ロシア民間人が組織したもので商船と多少の戦闘能力のある予備巡洋艦からなっていた）が多く**の**兵員、移住民を極東に運んでいることを数字をあげて説明している。1902年には、飯島は、「露国大臣ウイッテ氏絶東巡回復命書妙訳」と題するウイッテのシベリア鉄道、東清鉄道に関する報告書を日本語に訳して東京に送っている⁽¹¹⁾。ポーツマス講和会議に於いてロシア側全権代表であったウイッテは、オデッサ大学の物理数学科を卒業しオデッサ鉄道勤務で頭角を現した経歴があり、この事から飯島はウイッテのシベリア鉄道報告に注意を払ったものと思われる。

(4) 1904年2月10日に日露戦争がはじまると3月25日にオデッサ領事館は閉鎖される。同時期にサンクトペテルブルクの日本公使館も閉鎖されたこともあってオデッサ領事館閉鎖に関する訓令は全て牧野伸顕駐オーストリア・ハンガリー帝国公使から出されている。その当時は、現在のウクライナの西部は、オーストリア・ハンガリー領でありオデッサから地理的に最も近かった事が理由であろう。飯島は閉館に際して、オデッサの長官が不測の事態が起こらないよう退去するまで領事館の安全警備のためロシアの官憲を派遣するとの配慮を行ったこと、オデッサの邦人は2名に過ぎずその一名は、酒癖が悪かったがイスタンブールに退去することを薦めたこと、領事館閉鎖後の家賃の支払いについて家主と交渉したが家主は好意的であった事を報告している⁽¹²⁾。オデッサ領事館閉鎖後、飯島領事と松本書記生は、日本に戻ることなくウイーン経由でオスマントルコ帝国首都コンスタンチノーブル（イスタンブール）に移り、同地で情報収集活動を継続する。日本はこの時オスマントルコに公館を有していなかったのである。飯島がコンスタンチノーブルに移ったのは、日本政府の最大の関心事がロシア黒海艦隊とバルチック艦隊の動向及びバルカンの動向を引き続き監視することにあった事による。特に黒海艦隊についてはトルコのダーダ

オデッサ領事館異聞

ネルス海峡を通過するか否かでありそのためにトルコがロシア黒海艦隊の通過を認めるかがその関心事であった。当時は1841年のロンドン協約、1856年のパリ条約、1871年のロンドン条約、1878年のサンステファノ条約でダーダネルス及びボスポラス海峡の軍艦通過は禁じられていた事から本来黒海艦隊はもっぱら黒海においてロシアがトルコに対する軍事的優位を確保するために設立された艦隊であって黒海の外には出ることは条約違反であると考えられていた。しかし、日露関係が緊張するに及んでロシアがトルコに圧力をかけ黒海艦隊の海峡通過を認めさせるとの風評が飛び交っていたのである。又この時、トルコとブルガリアの関係が緊張しており、トルコがブルガリアを攻撃するとの情報が乱れ飛び、その場合ロシアがブルガリア支援のために動くかが欧州の一大問題となっていた。日本からしてみればロシアがトルコとの戦争を開始すればそれは極東におけるロシアの動きが制約されるので極めて注視すべき問題であった。

(5) そのため飯島は日露戦争が始まった2月から3月中旬にかけて(オデッサ領事館閉鎖直前)にバルカン調査のためオデッサからコンスタンチノーブル、ブタペスト、ブルガリアを訪れている。3月10日、飯島は、コンスタンチノーブルに於いてトルコ政府の海軍教育に携わっていたイギリス人海軍パーシャ中將(Sir Woods Pasha, Vice Admiral)と会談し、黒海艦隊の動向につきパーシャ中將の発言であるとして以下の報告を東京に行なっている。パーシャ中將は明治維新前に英国海軍の軍艦船長として日本を訪れたことがある事から日本に特別の好意を持っていた。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾

(ア) 日露開戦のひと月前ロシアはトルコに艦隊の海峡通過を求めたがトルコはそれを拒否している。又今後同様の要請をロシアが行っても英国とイタリアが反対するであろうから艦船の通過はないであろう。

(イ) そもそも黒海艦隊の艦船は老朽艦が多く新造艦も遠洋航海には向かな

いものが多く石炭の供給問題もあり極東にまで派遣するのは物理的に困難である。

（ウ）（飯島よりそうは言ってもロシアが黒海艦隊のダーダネルス海峡通過を強行した場合はどのようなリアクションが起こるのかと質したのに対し）トルコは力でそれを阻止できないが明確な条約違反であり、ドイツ、フランス、オーストリアは実力でそれを阻止しないだろうが、英国とイタリアはこれを問題視するであろう。英国が黒海艦隊の通過阻止のために実力を行使するか否かはその事態になってみなければ明言できないが、日本が英国との同盟にある事、黒海艦隊が地中海に出てくる事は地中海の軍事バランスを崩すこと、ロシアのバルカンにおけるスラブ政策の脅威から見ても英国の公論は戦争をしてでも阻止すべきとなると思われる。

（エ）ただ注意する必要があるのはロシアが義勇艦隊を商船としてトルコ政府に通知する事なく海峡を通過させるとの既成事実を作る場合にはトルコがこれを追認せざるを得ない事態があるべきことである。

（オ）ロシアは、近年黒海艦隊をボスフェラス海峡付近に派遣し、列国に対し海峡の通過の自由があるとの既成事実化のための示威運動を行ったり、義勇艦隊を商船と称して兵器、兵士を搭載して海峡を通過させた実績がある。かつてはその場合事後にトルコ政府の承諾を得たが最近は無断で義勇艦隊を商船であるとして通過させている。

（6）飯島は、3月には日露戦争開始に伴うオデッサ領事館閉鎖のためにイスタンブールから一度オデッサに戻り4月に上記の通りウイーンを経て再びイスタンブールに移る。そこで元海軍大尉であって中村商店をイスタンブールで営んでいた中村健次郎の協力を得てダーダネルス海峡を通過する船の監視を

オデッサ領事館異聞

行っている⁽¹⁵⁾。イスタンブールに於いて飯島は外交官としてではなく新聞通信員松本という偽名を使っていた。ロシア及びトルコ政府に飯島の諜報活動を知られないための配慮である。しかし在コンスタンチノーブルのロシア大使館は飯島の本姓を知っていたようで常に飯島を尾行した。又4月、飯島は、風邪をこじらせた病気になる現地のフランス病院に入院する。その後退院はしたものの完全に回復しなかった事、ロシアが既に飯島の活動を警戒しており同人の身の安全上の問題があるとの理由で結局秋にはウイーンに戻る事となる⁽¹⁶⁾。飯島はそれでも8月18日コンスタンチノーブルから東京にロシア義勇艦隊のダーダネルス海峡通過問題に関する報告書を取りまとめ送っている⁽¹⁷⁾。肝心の黒海艦隊に関しては結局ダーダネルス海峡を通過することをトルコは許可しなかったけれども、1904年7月4日にロシアの義勇艦隊の3隻（石炭輸送船に限られた）が軍艦でない事（軍艦旗を掲げない、武器の搭載の有無をトルコ側が点検する）を条件に海峡の通過を認められた。通過に関しては、イスタンブールからの報告であるとして牧野駐オーストリア大使から東京に電報が出されている。その電報によれば7月4日に「ペトルスブルグ号」と「スモレンスク号」及び「オーレル号」の3隻の義勇艦がダーダネルス海峡を通過したとある⁽¹⁸⁾。海峡を通過した義勇艦隊はその後エジプトのポートサイドに寄港しスエズ運河を商船旗を掲げながら航海のうえバルチック艦隊に合流している。飯島が3月にイスタンブールに於いてパーシャ中將から聞いた通り黒海艦隊がダーダネルス海峡を通過することは、トルコそしてその背後にある英国が拒否したけれども商船と称する義勇艦隊の通過は認めた事になる。ロシアが義勇艦隊に石炭をのせてバルチック艦隊に合流させた背景には、バルチック艦隊が英国領の入港を拒否され、その途次において石炭をはじめとする物資の調達が困難を極めた事から石炭を積んだ義勇艦船が必要であった事がある。なお義勇艦3隻通過の情報の出所について牧野大使は、イスタンブールからの報告によるとのみ記しており具体的名前を述べていないが⁽¹⁹⁾、イスタンブールで商売にかかわりつつ飯島に協力していた山田寅次郎及び中村兩名からもたらされたものではないかと考えられて

いる。

(7) 日露戦争がはじまり飯島領事がオデッサを退去した後、現地においては富樫喜一という日本人が領事館の管理人を務めた。富樫は、その後のオデッサの状況を記録にとどめるが1904年8月13日に市内を散歩中にロシア官憲にスパイ容疑で逮捕されてしまう。日露戦争中のロシアにおける日本の利益代表は米国であったのでオデッサ米国領事であったトス・ヒーマンが介入し8月17日に富樫は、ウイーンに国外退去となる。この富樫は日露開戦後のオデッサの状況を次の通り牧野伸顕公使に報告している。⁽²⁰⁾

(ア) 日露開戦後オデッサの経済は不景気となり手工業者は働き手の解雇に踏み切っている。他方でオデッサは治安が良いというので内陸部より多くのポーランド人その他の住民が市に流れてきている。市内には多くの乞食の姿が見られ市長が金持ちの商人に救済を呼びかけている。

(イ) オデッサは、ギリシャ系、ポーランド系、ユレー（ユダヤ）系が多い国際都市であるので住民は日本に同情的である。住民は戦争に関してロシアの新聞の報じるところを信じていない。人々は、動揺しているが表向きは公園における音楽会その他が通常通り行われている。公園の飲食店の収入は開戦前に比べ半額になっている。自分が拘留されている間ユダヤ人が同室に拘留されていたがそのうちの何人かが旅順港は陥落すると叫んでいた。これがオデッサの一般の空気を表している。

(ウ) オデッサの要塞にいた6000名の兵隊が東アジアの戦線に送られその後義勇兵として学生が送られた。7月下旬より黒海艦隊の艦船が毎日1隻から2隻港に入港出港を繰り返している。8月よりは8隻から9隻の義勇艦隊の船が港に入ってきているが何を行っているかは不明である。バルチック艦隊の動き

オデッサ領事館異聞

と連動しているのかもしれない。

(8) 1905年に日露戦争が終了すると翌年の1906年4月には早くもオデッサ領事館が再開され飯島亀太郎が領事として復帰している。オデッサ領事館がポーツマス講和条約の調印から7か月後には再開された背景には外国人が多かったオデッサにおいて戦争中も対日感情が特に悪化しなかった事があり飯島としても復帰しやすかった事がある。8月に飯島は休暇帰国ということでオデッサを離れるがその後カルカッタ領事への異動を命じられたため書記生であった福田直彦がそのまま残り1906年12月には正式に副領事としての委任状を受けている。領事代理といったところであろうか。なお飯島亀太郎はその後1913年から14年にかけてニューヨーク総領事に任命され、当時カルフォルニア州で議論されていた排日土地法に反対するロビー活動にあたる事となる。1907年4月1日には佐々木静吾書記生が福田副領事の補佐としてオデッサに赴任してくる。佐々木は当時オデッサについて、経済界は衰微し、革命派テロと、ロシア国民協会の反革命テロが交差し日々血なまぐさい事件が頻発していたと述べている。⁽²¹⁾ 佐々木はオデッサにおける革命のテロとして次の事実を語っている。⁽²²⁾

(ア) オデッサの中心部にあった警察署のすぐ近くで歩いていた警部に爆弾が投げつけられ、警部の体は粉々となり片足だけが跳んで路端の家の2階の窓側にぶら下がるとの事件が起こったが犯人は捕まらなかった。

(イ) 官憲が殺害された後はその葬儀において黒シャツを着たロシア国民党員(チョルノソーテンツ)と称するグループが報復のため、ユダヤ人の商店や住宅に乱入し狼藉を働く事態が発生したが警察はこれを阻止しないどころかこれに加勢するものもいて市民の怨嗟の声が高かった。

(ウ) 一人の妙齢の夫人がオデッサ軍管区司令官カウリバラス大将(日露戦

争で満洲従軍）に紹介状を持って面会の上爆弾で暗殺を企てた。この夫人が大將の官邸の前の通りを散歩と見せかけて歩いているうちに爆弾を落としたことから逮捕され大將は無事だった。しかしこの事件は革命派が暗殺のために若い婦人をも利用した一例として記憶された。

（エ）革命派は資金調達のため大会社、銀行、商店を襲撃した。ある日、市の中央にあるデパートが襲撃されたことがある。午後4時ごろ人出の多い時刻に革命派の青年がデパートの2階で支配人に面会の上爆弾を突き付け、青くなった支配人から金を受け取るとともになげに支配人室から退去し買い物客で込み合う中を通り抜け戸外に姿を消した。その機敏さと落ち着きぶりに市民は舌を巻いた。

（オ）革命党の一味が警察隊に追撃されたことがあり、革命党員の一人の女党员が打たれ倒れたので最初は他の何人かの党员がこの夫人を抱えて駆け出した。しかし警察に一網打尽となる恐れが出て来たので男党员は女党员に数弾打ち込んで完全に死んだことを確認の上逃走した。市民の間では危急の場合には証人を残さぬため同士を殺すという用心深さは感心なものだと評判になった。

他方で佐々木はオデッサは住民は50万であったがその半数はユダヤ人で市民は社交的で外国人を毛嫌いせず外国人にとっては気楽な街であったと述べている。佐々木は、オデッサ市は家並みが整然としていて非常に気持ちの良い街であると、特に街路樹のアカシアの花が咲く時は満都芳香に覆われる状態であったと記している。そしてオデッサはロシアの他の都市のような重苦しさがない爽快な好い気持ちの街であったと結論付けている。佐々木は仕事に関しては日露戦争後でもあり日本との関係は貿易、軍事に於いてほとんどなく又邦人もいない事から暇であったと記している。

オデッサ領事館異聞

(9) 1908年7月日本政府は経費節約を理由にオデッサ領事館を閉鎖しドイツのハンブルグに新たな領事館を開設することを決定した。福田と佐々木にハンブルク転勤を命じる。ところがこの時、小村寿太郎駐英大使が外務大臣就任の為ロシア経由で帰朝する途中、ペトルブルクで本野大使に会い「政府はオデッサ領事館を閉鎖するとの事だがロシア関係がますます重要になる時期に減らすというのは穏やかでない」と言われたことからオデッサ領事館のハンブルク移転は延期となる。結局、小村大臣の意見で一度決めたオデッサ領事館閉鎖はやむ得ないが館員は、ハンブルクではなくモスクワに於くということに変更された。こうして1909年3月オデッサ領事館は閉鎖され福田と佐々木はモスクワに転勤した。福田と佐々木は、ハンブルグではなくモスクワ勤務になった事を喜んで⁽²³⁾いる。

(10) 領事館は閉鎖されたがその後も日本政府におけるオデッサの関心は高くロシア革命直後の1919年3月には外務省に於いて革命後のソ連の経済事情調査の一環として「オデッサの経済事情」と題する調査⁽²⁴⁾が行われている。その結論として日本とソ連との貿易拡大のためにはオデッサと日本の間を直接結ぶ航路を開設すべきことが提案されている。

4. ソ連時代のオデッサ領事館

(1) ロシア革命後の1925年1月に日本とソ連の国交が回復された。日本は新たに領事館をオデッサに於くことを決め、回復と同時期の1月佐々木静吾が領事として赴任する。1909年にオデッサを去った佐々木書記が16年ぶりに領事として復帰した。佐々木によればオデッサの様子はすっかり変わっており、港の周囲にあった高架鉄道は全てなくなっていたが穀物輸出の港湾設備は整備され穀物輸出期には多数の船が港に入る順番を待っているという盛況であったという。ただしオデッサ市の人口は革命前は60万であったが1925年は32万に減少している事、貨物の集積量そのものは革命前の一割に過ぎない事、市内は革命

前と変わらないが郊外の家屋は革命と内乱で破壊されたままになっている事を東京に報告している。⁽²⁵⁾ 佐々木は現在もポチョムキン階段近くにある「ロンドンスカヤホテル」に住居を構えたとの記録がある。前述の「ブリストルホテル」と並んでも今でも帝政時代の名残を残すホテルである。オデッサ領事館の再開は1925年の日本とソ連との協議における双方最大限9か所の領事館を設置するとの合意を受けてのことである。

(2) 1926年11月には島田滋が任命されている。1930年には田中文一郎領事が、1934年には平田稔領事が最後の領事としてオデッサに赴任している。この時の領事館はオデッサ市プリワル フェリドマン一番 (Bula Feldman no. 1) にあったとの田中領事よりの報告がある。平田領事はオデッサに着任後ソ連関係の強化に注目し1936年3月には東京にウクライナ共和国の首都キエフに領事館を開設する必要性を訴えている。ところが1937年にいたってソ連は突然オデッサとノヴォシリヴィスクの領事館の閉鎖を求めてくる。前述した1925年の合意により日本とソ連両国はそれぞれ8か所の領事館を設けたわけだがソ連はその後長崎と東京の領事館を閉鎖する。そのため1937年5月に至ってソ連は双方の領事館の数を同じくしたいとして日本側に両領事館の閉鎖を求めて来た。⁽²⁶⁾ 1925年の合意は上述の通り双方の領事館の数の上限を定めているのであって同数主義ではない。この事から日本は要求を拒絶し東京、モスクワ双方で折衝が続けられたが8月に入りソ連側は、9月15日以降は両領事館の職務執行を認めないとの通告を一方的に行う。9月15日になるとソ連側は平田オデッサ領事夫妻に対し郵便物配達の停止、大使館との電話連絡の切断、運転手、女中の逮捕、ついには水道、ガス、電気の供給までたってしまうとの暴挙に出たので領事館は職務不能の状況となった。こうして日本は止む無く9月30日に平田領事の引揚を行ったのである。9月20日、日本側はモスクワに於いてソ連側に対しソ連が協定に違反してオデッサとノヴォシリヴィスクの領事館の活動を不可能にしたため館員を引き揚げる事とするがこれは、ソ連による圧迫のための一時引揚げ

オデッサ領事館異聞

であり閉鎖ではないとの抗議を申し入れている。平田領事は、引揚に際してソ連側から非人道的な犯人にも等しい扱いを受け、拳句の果てに引揚のための乗車券の発売、荷物の運送までも拒否された事、ともかく脱出できたのは普段より親しくしていたイタリアの領事の仲介によるもので天祐としか思えないと公電を東京に送っている。⁽²⁷⁾平田領事はこうして10月1日、兎にも角にも日本公使館のあったルーマニアの首都ブカレストに10月1日に逃れることができた。ソ連は1938年、日本側にさらにハバロフスクとブラゴエシチェンスクの領事館の閉鎖を求め日本側の抗議にもかかわらず同様の手段で領事引揚に追い込んでいる。ソ連は、当時日本だけでなく米、英、ドイツ、ポーランド、イタリアといった国に対しても領事館の閉鎖を求めてきておりその背後にはスターリンが外国公館がスパイ活動の巢窟となっており政府転覆を狙っているとの猜疑心を持っていたことが影響していたとみられている。それにしても日本に関しては、1936年の日独防共協定に対するソ連の反発があったとしても平田領事に対し行ったソ連邦の外交儀礼を無視した対応は日露戦争時ロシア帝国が退去する飯島領事に対し丁重な扱いを行った事に比較しても問題があったと言わざるを得ない。

(3) 芦田均のオデッサ訪問

戦後総理となった芦田均は、ロシア革命のさなか1918年にキエフを訪問しているが（この件に関しては後述する）、その10年後の1928年7月、同人はトルコ大使館勤務時代にオデッサをはじめとする黒海を周遊し「黒海周遊記」として本にまとめている。⁽²⁸⁾芦田はこの時オデッサに於いては「ロンドンスカヤ」ホテルに宿泊し、島田滋領事の案内で街を探索している。芦田は「ロンドンスカヤ」ホテルについて天井の高い贅沢なものであるがもう何年も手入れを怠っているので薄汚れており、シーツは擦り切れ、穴がのぞいている淋しいものであったと記している。オデッサ港についても帝政時代は小麦、バター、木材を輸出していたのに農産物の輸出が止まったので港には全く船の姿がなく、街全体に物が無い、金がない、心の安定がないという現象が現れているとし、革命

前に比べ生活水準が著しく低下していると述べている。1925年のオデッサは、佐々木領事によれば取引総量事態は革命前に比し大幅に減少したけれどもソ連の外貨獲得のための農産物輸出により活気を呈していたとされるが、芦田の記述によればその3年後にはその農産物の輸出もママにならない事態に陥っていたことがわかる。1928年は、スターリンによる外貨獲得のための無理な農産物輸出政策と農業集団化政策とそれに反発するウクライナ農民に対する弾圧がたまってその後の1932年に起こるホロドモール（ウクライナ大飢饉）の前兆がみえ始めていた時期である。この頃になると外貨獲得の手段であった農産物の輸出もできなくなっていたのだ。

芦田は島田滋領事夫妻とオペラ座でドフトエスキーの「馬鹿者」という芝居を鑑賞しているが、オペラ座について革命後のオデッサにおいて食物と衣服が恐ろしく質を下げたにもかかわらず帝政時代の宏大な建物だけが役に立っているとし、貧しい観客と壮大な建物は不調和を極めていているとしている。芦田は又オデッサの博物館のスキタイ文化のコレクションに感心し、絵画館のレーピン、ブルーベリの大作にふれ、これら芸術と貧しい服装の市民を比べ、双方は没交渉であると述べている。芦田は、ロンドンスカヤホテルでユーリエフという帝政時代に一世を風靡した俳優と偶然会いホテルのレストランで食事を共にしたがその時の話の結論は革命後のソ連の文芸音楽は悲しむべき不産時代に陥ってしまったというものであったと述べている。芦田は、革命前のザンクト・ペトルスブルグ勤務時代に、ユーリエフの芝居を幾度となく見、弁護士会長カラブチェウスキーの壮麗な客間で数回会っているのだ。

5. その他の戦前の日ウクライナ関係

第2次大戦前にあったウクライナと日本とのかかわりについてオデッサに限らずウクライナ全国に広げて考えると次のような交流が思い浮かぶ。

オデッサ領事館異聞

(1) 山田耕筈, プロコフィエフ, シロタ

20世紀を代表する作曲家であるプロコフィエフは1891年に現在のウクライナ、ドネツク州ソンツォフカに生まれている。プロコフィエフのバレエ「ロメオとジュリエット」が大好きな私はこの生地をおとずれた事がある。今でも大変な小さな町であり音楽ホールにささやかなプロコフィエフの記念コーナーがあったのを覚えている。プロコフィエフは、ロシア革命を避け1918年にシベリア鉄道をへて6月から8月まで日本に滞在その後米国に渡っている。山田耕筈は1918年にニューヨークでプロコフィエフに会っている。レオ・シロタは、1885年にキエフで生まれたピアニストで1929年に山田耕筈の招きで来日し東京音楽校（現・東京芸術大学音楽学部）の教授に就任して15年間日本に滞在している。シロタはハルピンで山田と知り合っている。このような縁があって山田耕筈は1931年にモスクワ、レニングラードに加えキエフを訪問し演奏会と講演会を行っている。

(2) 芦田均

1948年に首相となった芦田均は外務省の官僚で1912年から1918年に最初の任地としてサンクトペトロブルクに3等書記官として赴任している。その記録として「革命前夜のロシア」をあらわした⁽²⁹⁾。芦田はロシア革命最中の1917年7月ウクライナを訪れキエフ、ドニエプロ、ポルタヴァ及びハルキウを訪れている。キエフには5日間滞在しているがよほど気に入ったらしくキエフをドニプロ川の川蒸気船で去るにあたってキエフが今まで訪れたロシアの中で一番になつかしみの多い古い都であると記している。芦田は、ソフィア教会、ウラジミール教会、ペチュルスカ大修道院を訪ねている。革命までロシアの教会がロシア神権政治の守護者であった事、ロシア帝政が倒れても正教の信仰が勢力を振るう間は正教徒は何もの影に自己のツアールを見出そうとするであろうと述べている。現在のプーチン大統領とロシア正教会の緊密な関係を見るとその洞察力に関心する。芦田がキエフを訪れている間、既にキエフはウクライナ自治運動

の混乱のさなかであり滞在3日目の朝はドニプロ川の対岸に退却した暴動兵の砲撃で目がさめたと記している。芦田はこれについて、キエフ市の元市長や法曹界の長老と会いこれらの要人がウクライナの自治運動はドイツとオーストリアが扇動したとの見方を示したことに同意している。芦田は、ウクライナ人がモスクワ以前にルーリック王朝がキエフに都して正教を受け入れたこと、文学、建築、宗教の全てに渡ってキエフはモスクワにもペトログラードにも劣らないと自負していると述べている。芦田は、また、ウクライナ人は北方ロシアに比べて南国の光と肥沃な土地に恵まれて敏捷であり想像力に富み活動的であると高く評価している。しかしと芦田は続けてウクライナ人は人種、文化、宗教の面でロシア人と同族であり帝政ロシアに於いて差別を受けた事はなかったのであってウクライナの自治運動はドイツとオーストリア勢力がウクライナ国内の戦争反対勢力を先導して起こしたものと断じておりウクライナの独立運動には冷淡である。芦田がアレクセイ・トルストイが「キエフはロシア人のエルサレムである」と述べたことを引用しつつキエフを奈良七代七堂伽藍の盛大を思い起させる街であるとしていることに私は賛成を表すものである。芦田がキエフを訪れたその10年後の1928年にオデッサを訪れた事は前述したとおりである。

(3) 閑院宮

1916年に成立した日露同盟を記念するためにその年の9月に閑院宮がロシアを訪問した際、9月25日にキエフでマリア・フヨードロヴナ皇太后を訪問している。閑院宮はフランスの騎兵学校サン・シールで教育を受けたことからフランス語に堪能であり皇太后ともフランス語での会話を不自由なくこなしたものである。なぜキエフに皇太后を訪問したかといえばその頃皇太后は、宮廷内のラスプーチン派と反ラスプーチン派の争いに巻き込まれ、ペトログラードにいらなくなりキエフのマリンスキー宮殿に移っていたからである。皇太后は1917年2月の革命3月のニコライ2世退位の知らせをマリンスキー宮殿で聞いている。皇太后はその後クリミヤを経て英国王ジョージ五世が派遣した戦艦

オデッサ領事館異聞

で黒海経由ロンドンに逃れている。キエフのマリンスキー宮殿は、現在ウクライナ大統領の迎賓館になっておりロマノフの栄華を思い出させる贅を尽くした宮殿である。私にとって忘れ難いのは離任の際、ポロシェンコ大統領夫妻が私と家内のために送別のランチをこの宮殿で開いてくれた事である。ちょうどその時期は、10年以上にわたったマリンスキー宮殿の改修工事が終わり、私が宮殿内を見たいと大統領府に願い出たところそれを聞いた大統領がそれならばと自ら宮殿内をくまなく案内してくれるとの光栄にも浴した。公の広間だけではなく大統領の私的な職務室まで見ることができたのは幸運であった。それまでウクライナ大統領が離任する大使の送別ランチをマリンスキー宮殿で行ったとの前例はなくキエフの外交団の話題となったものである。

6. オデッサ探訪

最後にオデッサの魅力について述べたいと思う。オデッサ市はウクライナの中にあってはザンクト・ペトロスブルグに最も近い街並みを有している。町が碁盤の目の様に作られていることがそうさせているのかもしれない。時間をとってゆっくり市内を散歩することが最高の楽しみ方であろう。

(1) 国立オペラ・バレエ劇場

1810年に建てられた初代のオペラ座は火災で焼失したため1887年にウィーンのフェルナー・ヘルマー建築事務所のデザインで再建されたものである。フェルナー・ヘルマー事務所は、プラハ、チューリッヒ、ザグレブ、ブラチスラヴァ、ウィーン（ただしヴォルクス劇場）をはじめとする多くのオペラ座を設計した当時最高のオペラ座建築事務所である。外観はルネサンス様式とバロック様式が混合した設計であるが何よりも内部の装飾がロココ様式でその華麗さには圧倒される。私も世界中の主なオペラ座を訪れているが繊細華麗さに於いてこのオペラ座の右に出るものはあるまい。幸いこのオペラ座は、第二次大戦中、激戦が行われたオデッサにおいてもほとんど被害を受けなかった。帝政ロシア時

代にはロシア国内最高のイタリアオペラの殿堂とされておりチャイコフスキー、シャリアピンなどが演奏を行っている。なおウクライナは、現在においてもオペラ、バレエが盛んで首都キエフのオペラ座、リヴィウ市のオペラ座もそれぞれ美しい。前述した芦田の演劇鑑賞はこのオペラ座であった。芦田はオペラ、バレエ、演劇が大変好きだったことはロシア革命のさなかザンクト・ペトロブルク市内で市街戦が繰り広げられている時も演劇を見た事からも想像に難くない。⁽³⁰⁾

(2) ポチョムキン階段

1925年制作のセルゲイ・エイゼンシュタイン監督の「戦艦ポチョムキン」で有名な階段。ポチョムキン階段の壇上に広がる並木通りは美しく歴代の日本領事がどのような思いでここを散歩したかを考えると感慨深いものがある。並木道の周辺には帝政ロシア時代の総督の宮殿、リシュリュール像、市役所といった見どころが集まっている。エカテリーナ女帝の像も遠くないところにある。ロシア総督の宮殿は総督の名前をとってヴォロンツォフ宮殿と呼ばれており飯島亀太郎の領事館もこの近辺にあった。実際の戦艦ポチョムキンの事件は日露戦争最中の1905年6月に起こっており、映画「戦艦ポチョムキン」で乳母車が階段を落ちていく有名なシーンもここで撮られている。

(3) ブリストルホテル、ロンドンスカヤホテル

両ホテルともロシア帝政時代は上流階級の宿泊、社交所としてにぎわった。前述のように両ホテルに一時期日本領事が滞在したとの記録がある。顧客リストにはブラジル皇帝ペドロ2世、イザドラ・ダンカン、アントン・チエホフ、ロバート・ステイブソンの名前がある。両ホテル、特にブリストルホテルは今日でもオデッサ最高のホテルとされており、オデッサに行かれる際には滞在をお勧めする。滞在しないでもダイニングルームで豪華なシャンデリアを眺めながら古のオデッサに思いをはせつつケーキとお茶を頂くのも一興であろう。

オデッサ領事館異聞

芦田がオデッサ訪問時に滞在したホテルはロンドンスカヤホテルであるが栄華を誇ったホテルもロシア革命後はかなり荒れ果てていた。

(4) オデッサ・パッセジ ギャラリー (Passage of Odessa)

オデッサ・パッセジと呼ばれるショッピングギャラリーがある。現在は土産物を中心とした店しかないが帝政ロシア時代には上流階級が集う屋内ショッピングセンターであった。バロック様式の彫像で飾られた建物が並ぶ姿は壮観である。天井は、ガラスで覆われており全天候の作りとなっている。私と家内はオデッサの土産物は必ずここで求めた。

(5) 御変容カテドラル

モスクワ総主教座に属するオデッサ最大の教会。大理石の見事なイコノスタシスがある。19世紀につくられた教会は1936年に革命政府により破壊され2003年に復興されたものである。

(6) 美術館

市内にはいくつかの美術館があるがそれぞれ収藏品よりも建物に魅力がある。そのなかでも Museum of Western and Eastern Art ではいくつかのイタリアやオランダの巨匠の絵を見ることができる。プーシキン博物館はオデッサに滞在したプーシキンの家が再現されている。その他考古学博物館の建物も古典様式の瀟洒な建物である。中心部から少し離れるがオデッサ美術館はポーランドの大貴族であったポトツキー伯爵の邸宅を利用した美術館である。ポトツキー家は19世紀には現在のウクライナに多くの領地を持っており、リヴィウのポトツキー宮殿、キエフとオデッサの間にあるウーマニ市にソフィア公園が残されている。ソフィア公園は、良く整備された英国式自然公園であり園内には大きな滝が流れ落ち、春の新緑、秋の紅葉が美しく湖には小型遊覧船が浮かび馬車で散策ができるので私と家内は春夏秋冬と飽きずに訪れた。

(7) 郊外にはロシア帝政時代の商人，貴族が建てた屋敷が多く残るが荒れ果てているのは残念である。これを整備すればよい観光資源となろう。

(了)

参 考 文 献

- (1) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B16080192900 (画像 0346-0347) 露国人アンドレフスキー氏名誉領事ニ任命ノ後廃除の件，各国駐在帝国領事任免雑件/オデッサ之部 (外務省外交史料館)
- (2) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B16080182900 (画像 0344-0345) 露国人アンドレフスキー氏名誉領事ニ任命ノ後廃叙ノ件，各国駐在帝国名誉領事任免雑件/「オデッサ」之部 (外務省外務資料館)
- (3) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B16080183000 (画像 365-366) 各国駐在帝国名誉領事任免雑件/「オデッサ」之部 (外務省外務資料館)
- (4) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B16080183000 (画像 365-366) 各国駐在帝国名誉領事任免雑件/「オデッサ」之部 (外務省外務資料館)
- (5) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B16080183100 (画像 0422-0425) 各国駐在帝国名誉領事任免雑件/「オデッサ」ノ部 (外務省外務資料館)
- (6) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. 160800971009 (画像 0409-0410) 各国駐在帝国領事任免雑件「オデッサ」之部 (6.1.5.6.-43) 外務省外交史料館
- (7) 同上 (画像 0412-0413)
- (8) 同上 (画像 0417)
- (9) 「在外武官の研究」内山正熊，慶応大学法学研究出版1981年 p 44-p 45
- (10) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B07090216600 (画像 0094-0098) 露国南兵動員ニ関スル風説取調ノ件 (外務省外交史料館)
- (11) 国立国会図書館デジタルコレクション，NDLJP11031291
- (12) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B07090547000 (画像 0064-0070) 日露戦役ノ際在露帝国公館撤退及び帝国臣民引揚並米国政府保護一件第3巻 外務省外交史料館
- (13) 「日露戦争とトルコ」池井優，慶應義塾大学法学研究会2004年 p 5-p 8
- (14) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B07090604000 (画像 0053-0061) 日露戦役関係露国黒海及び義勇両艦隊ノ動静関係雑纂 (外務省外交史料館)
- (15) 「20世紀前半イスタンブールにおける日本軍部の活動」三沢伸生，東洋大学社会部，2015年 p 5
- (16) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B16080762800 (画像 0490-0494) 日露開戦ノ際ニ於ける露国ノ動静ニバルカン半島ノ状況視察ノ為飯島領事及松本書記生土耳其へ出張ノ件 (外務省外交史料館)

オデッサ領事館異聞

- (17) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B07090604000 (画像 0173-0190) 日露戦役関係露国黒海及義勇両艦隊ノ動静関係雑草/ダーダネルス海峡通過問題 (外務省外交史料館)
- (18) 同上 (画像 0078-0079)
- (19) 同上 (画像 0078-0079)
- (20) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. 7090547000 (画像 0073-0088) 日露戦役ノ際在露帝国公館撤退及帝国臣民引揚並米国政府保護一件 第3巻 外務省外交史料館
- (21) ソ連研究4 (12) ソ連問題研究会 1955年12月 p 53-55
- (22) 同上
- (23) 同上
- (24) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B1007020300 「オデッサ」経済事情 (官抜265) 外務省外交史料館
- (25) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B10073461500 (画像 0174-0177) 各国港市関係雑件 (外務省外務資料館)
- (26) 昭和12年5月14日佐藤外務大臣発在ソ連邦重光大使宛電報第185号
- (27) 昭和12年10月4日ブカレスト発本省宛電報第2号
- (28) 1958年 『革命前後のロシア』 自由アジア社 黒海周遊記 pp 451-469
- (29) 1950年文芸春秋新社 pp 352-384
- (30) 『革命前後のロシア』, 芦田均 1955年 自由アジア社 p 303

History of Japanese Consulate in Odessa

Shigeki Sumi

It is a well known fact that Japan had an Odessa legation from 1902 to 1937 with some intervals. In the 19th century, Odessa was one of the biggest cities in Russia only after Moscow, St Petersburg and Warsaw. After the opening of the Japanese legation in St. Petersburg in 1874, Japan wanted have a diplomatic mission in Odessa and as early as 1889 Japan nominated a prominent local person in Odessa called Constantin Andrefskie as an honorary consul of Japan. Unfortunately he declined this post next year due to the fact that his patron ,the Governor of Odessa was removed from his post. Japan appointed Alexandre Rasheeff in 1891 as a substitute. He was a well known merchant in Odessa. However he died in 1898 while watching a play in a theater due to a heart attack.

By this time Russo Japanese relations was aggravated over the control of Korean Peninsula and Japan needed a diplomatic base in Odessa to collect military intelligence on the Black Sea Fleet movement in addition to the commercial interests. First Japanese Consul Kametaro Iijima arrived in Odessa in 1902. Russo-Japanese war broke out in February 1904 and Iijima made a trip to Constantinople, Budapest and Bulgaria to see the volatile situation in the Balkans where a possible war between Turkey and Bulgaria might break out. During this trip in Constantinople, Iijima met Sir. Woods Pasha, Vice admiral of the British navy, who was helping the reconstruction of the Turkish navy and had valid information about the possible passing of the Russian Black Sea fleet through the Bosphorus. For the Japanese navy it was a nightmare to see the unified fleets of

Baltic and Black Sea coming to the Far East. Sir Woods said in spite of Russian requests it was unlikely for Turkey to approve the sailing through of the Russian Black Sea Fleet and the UK would be also against this request and ready to stop the movements by using force. He continued however if a Russian request was limited to the passing of voluntary semi militia vessels it would be another story.

1904, February, Russo- Japanese war began and Odessa Consulate was closed in March. Iijima did not return to Japan but moved to Constantinople to continue to collect Russian military information. At that time Japan did not have a diplomatic presence in Turkey and needed a person to observe the movement of the Black Sea Fleet of Russia. Although Turkey did not allow the Russian Fleet to sail through the Bosphorus, three voluntary semi military Russian vessels carrying coal passed the strait to join the Baltic fleet in 4th of July 1904.

After Russo Japanese war ended in 1905, Odessa Consulate was reopened and same Kametaro Iijima returned. Seigo Sasaki who joined Odessa Consulate as a deputy Consul in 1907 left a record on the city as follows.

1, Economy in Odessa was in a bad shape and there were many bloody incidents between revolutionary terrorists and pro government nationalist groups.

2, There was an incident in which a police man was killed by the bomb and during the funeral of that officer the nationalist group attacked Jewish shops and residents as a revenge. The police did not stop these acts of violence.

3, Revolutionary group members attacked big companies, banks and shops to get financial resources and one day a man met a manager of a big department store where he threatened a manager by pointing a gun at his head and got money and disappeared without attracting any notice.

In 1908 Japan closed Odessa Consulate for a financial reason which was only reopened in 1925 after the revolution. The golden age of Odessa was lost with the revolution. Seigo Sasaki who left Odessa 16 years before, returned as a Con-

sul and found Odessa a very different city. The population of the city was halved from 600 thousand before the revolution to 32 thousand in 1925. Although the port was well equipped with agricultural product warehouses for export, the area outside the city was left damaged caused during the civil war of the revolution. In 1928 Hitoshi Ashida, prominent Japanese diplomat, who served in Russia before the revolution and later became the Japanese Prime Minister, visited Odessa and published a book called [A Trip in the Black Sea]. Ashida said there was a shortage of goods in the city against a backdrop of magnificent buildings built during the time of Imperial Russia. He saw the play in the beautiful opera house and saddened by the poorly attired audience. He also recorded even the well equipped port warehouses were empty.

Odessa consulate was closed in 1937 due to the request of the Soviet government who demanded the reduction of Japanese consulates in the Soviet. Japan refused this request on the ground that it was against the agreement between Japan and the Soviet. However the Soviet government made all kinds of harassment to force the consulate to the closure by terminating electricity and water supply, arresting local staff. Japan made a strong protest in Moscow but had to withdraw a consulate from Odessa.

Since then Japan never had a consulate in Odessa.